

初任者との関わりで工夫したこと

～令和4(2022)年度 指導教員アンケートより～

自信をもてるように

- 初任者が多忙な日々を送っているため、できる限り指導の時間を短くできるよう書面でのアドバイスを心掛けました。そして、まず頑張りを評価しました。その上で課題を初任者自身が考え、模索した上で、計画的に授業に臨めるよう配慮しました。また、課題やアドバイスがプレッシャーとならないように、やる気をもってもらえるよう一言一言に気を配りました。
- 私の意見を押し付けず、あまり細かい指摘はせず、授業・学級経営・部活動指導のバランスを考えた言葉掛けや指導となるよう工夫しました。また、本人のやる気やプライドを損なわないような言葉遣いで、共感的に指導助言を行うようにしました。



具体的な助言と見守り

- 初任者を褒めることを意識しながら、具体的に授業の仕方や子どもへの関わり方等のアドバイスをしました。放課後の指導では、授業の感想や改善点を初任者に考えてもらってから、主体的・対話的で深い学びにつながる授業づくりを意識しながら助言しました。
- 初任者の人間性や性格を尊重し、否定的なアドバイスは行わないように努力しました。また、授業の進め方や教具等についても、初任者が自分に合うものを選んで取り組めるように何種類かのやり方を提示し、複数の方法の中から自分や受け持っている子どもに合わせて、選択できるように努めました。関わり方の時間に関しては、1学期は細かい所までアドバイスできるよう多めに取り、2学期からは、徐々に関わり方の時間を少なくしていくことで、指導教員の支援が急になくならないように配慮しました。
- 勤務した日には、授業ごとに感想、良かった点や改善点について、子どもの反応や学習活動を中心にコメントしたものを渡し、次の授業に生かせるようにしました。口頭で子どもの様子を伝えたこともあります。勤務時間中に時間が取れないこともあるので、なるべく記述したものを渡すようにしました。授業で特に良かった発問や、子どもへの声かけ、学習活動の良かった点を取り上げて褒めることで、自信が持てるようにしました。なるべく、こちらから口出しはせず、困ったことや聞きたいことがあったら答えるようにし、初任者の自主性を尊重しました。担任がいなかったときに起こったことや、出張でいなかった時の子どもの様子、学級の様子など気付いた点を早めに伝え、子どもの様子を共有できるようにしました。
- その日に感じた課題について、すべてを伝えるのではなく、一番重要なものについてアドバイスするようにしました。また、具体的な事例を伝えることで、次の日から使えるように心掛けました。

- 初任者が自分のしたいことを自由にできるように、アドバイスするときと見守るときをバランスよく使い分けるようにしました。また、クラスや子ども一人一人に対する次の課題は何かを話す機会を多く設けました。
- 学級経営では、配慮を必要とする子や気になる子にスポットを当てて、指導を丁寧に行うことを伝えました。そのための席の配置、声の掛け方、個に応じた配慮がどういうことか等、指導日に初任者の様子を見て、できそうなことから1つずつ具体的に助言するようにしました。その時に気を付けたのは、助言は1課題につき1つだけ伝えるようにし、モチベーションを下げないように気を付けました。それでもうまくいかないときには、次のアドバイスを提示するようにしました。



初任者の個性やよさをとらえて

- 一人一人の初任者にも個性があり、課題が違うので、常にその人にあつた方法を模索し、一緒に話し合いながら、できるだけ初任者の気持ちに寄り添って課題解決に向けて取り組むようにしました。例えば、授業では、教材研究を行うのはもちろん、ワークシートのたたき台を提示しました。1学期には、授業をすることも初めてなので、まずは指導教員のやり方を示範授業で見せた後、提示したワークシートや指導方法に沿って同じように進めてもらいました。模倣しながらも、自分が実際に授業することで、初任者が感じる成果や課題が大切だと考えました。次の単元では、課題の部分を自分でどのように変えたいかをはっきりさせて取り組むことで、自分の目標ができたり、自分なりのやり方を掴んだりできていました。
- ある初任者は大学を卒業してすぐに採用され、教員の道を歩み出したため、社会人としての心得についても支援するよう心掛けました。日々の授業準備を一緒に行い、授業後には振り返ることで、次に向けての改善を繰り返してきました。また、空いた時間があれば、先輩教員の授業を参観することで、授業の進め方や子どもとのやり取り等を学べるようにしました。初任者がどんなことでも相談しやすい存在となれるように努めました。
- ある初任者は、0からのスタートだったので、1時間の授業の流れ、板書の工夫、教材研究、評価の仕方、通知表の書き方、生活指導の具体的な仕方等、教員としての基本的な指導について話しました。また、年間の行事についても計画的に行わなければいけないので、学期ごとに予定表を一緒に作り、見通しを持って取り組めるようにもしました。
- ある初任者は講師経験が長く、いろいろな教職員と出会い、たくさんのことを学んできていました。その経験を尊重しながら見守り、「今、困っていることは何なのか」に着目しながら、声掛けをしてきました。管理職や他の教員にも協力をお願いし、共通理解を図りながら進めました。

校内連携と情報の共有

- 「何か困ったら、管理職・先輩に相談する」を繰り返し伝えました。
- 同僚との関係性を築かせるため、困りごとの内容に合わせた相談相手を伝えました。
- 毎回の指導記録には、指導内容と板書等の授業記録や写真を添え、管理職にも確認してもらいました。また、初任者が一人で悩まないように、同じ学校や学年の教職員に初任者の様子を伝え、連携するよう努めました。
- 学級経営や教科指導、生活指導など具体的な日常の場面に即して、学校経営目標に則り、助言することを心掛けました。
- 本人の疑問や不安はしっかりと受け止め、指導時間内に解決できない内容は、管理職や各分掌担当につなぐことで、解決するための道筋を提示しました。
- 校内の教職員は、初任者に対して親しみを込めて接しています。特に所属学年の教員は、自ら指導のよいお手本となり、「見て学ぶ」環境を与えています。
- 私が兼務校に行く2日間の不在の時に、校内の教職員が教科指導における助言や生徒指導等、一緒に悩んだり考えたりしてくれました。「国語のことなら〇〇さん、体育関係は□□さん、生徒指導のことは学年団に聞いてみよう。」等、初任者に声を掛けていたので、教職員も協力的でした。
- 生徒指導上の問題が発生した時、管理職、同学年の教員と生徒指導の教員が、初任者から事情を聞き、どう解決していくかを話し合うことができました。私も初任者の指導日だったので、ともに話し合いに参加し、上手く進めることができました。初任者は、家庭連絡や当事者同士の話し合い、学級会等に真摯に取り組み、すっきりした気持ちで、その後に控えていた行事に臨むことができました。
- 「こちらが助言だと思っても、傷ついたり落ち込んだりしているのではないか。本当に必要な助言ができているか。」等、不安でした。時には、他の教職員が私に初任者の言動(事実)を伝えてくれることさえも、「指導教員として指導ができていない」と、批判されているように見え、孤独を感じることもありました。初任者指導は「初任者担当の仕事」と思うのではなく、「教職員みんなで育てる」という視点を持っていただいている管理職をはじめ、チームとしての意識を持つ教職員が増えてからは、とても取り組みやすくなりました。
- 普段から初任者が相談しやすい雰囲気職員間に醸成され、管理職や特別支援教育コーディネーターによる教室巡回や子どもへの声掛け、特別支援教育支援員による授業補助等の体制がとられていること等が、初任者の大きな助けや成長の原動力になっていると感じられました。校内での各教科担当や安全、生活指導、特別支援教育等の分掌担当による指導時間を、夏休み等に設けてもらおうと、より具体的な助言が得られ、初任者の安心や自信につながるのではないかと思います。



- 初任者にとって、教科指導、担任、部活動を、新たに赴任した学校ですべて行っていくことは負担がかかることだということを、年度当初に全員で共通理解し、支援体制を確認することが大切だと思います。また、管理職や初任者の所属する学年団の教員は、何かがあった時だけでなく、可能な範囲で定期的に本人へのカウンセリングを兼ねた聞き取りをしたり、管理職から初任者担当教員へ、初任者の抱えている課題や指導で期待したいこと等を伝えたりする時間を設定することが必要だと感じます。



校外研修の学びを校内での実践につなげる

- 過度な負担にならないよう初任者の状況も考慮しながら、初任者が校外研修で学んだことをその後の指導に生かせるようにするための手立てについて、一緒に検討する時間を設けました。
- 研修したことを初任者が意識できるように関わりました。また、校外研修での学びを生かしていた点を、より褒めるように関わりました。
- 初任者の時間的な負担を減らすため、なるべく短時間で指導するようにしていました。そうすると、指導しきれない部分があったので、それをリフレクションシートの記載で補うことができました。さらに、担当する初任者の実践を校内で共有するために、初任者指導通信を発行しました。

